

タクシー

ヨコテ

「えっ？ これからですか？ いえ、厭ではありませんよ。そんな……厭だなんて言える訳がないじゃないですか、岩村先輩。有り難いです。ええ、感謝しています。神様、仏様ですよ。勿論、急いで伺わせていただきます。えっ？ タクシーで？ タクシーはちょっと……。相性が悪いといいますが、出来れば避けたいんですが……。そうですか、もうそんな時間ですか。電車が終わってしまった……。分かりました。では、これから伺いますので宜しくお願いします」

小松は携帯電話を閉じた。タクシーには乗りたくなかったが、今すぐ来い、と言われたのでは仕方がなかった。

「タクシーで行くしかないか……」

小さな溜め息を吐くと、携帯を仕舞う手が震えていた。室内は寒くないのに、背中にも冷たいものを感じた。あれ以来、タクシーには乗っていない。タクシーが怖くて大きな通りには近づかないようにしていたのだが、こうなってはやむを得なかった。

小松は臆病風に吹かれている自分を叱咤した。

やっと金の工面が出来そうなんだ。岩村先輩が力を貸すって言ってくれたんだ。そんなことでどうする！

黒のダウンジャケットを着ながら店の外に出る。外気に身が竦み、足元が少しふらつく。この三日間、小松は殆ど寝ていなかった。金策に頭を悩ませて眠れなかったのではなく、眠りに就くのが怖かった。僅かの眠りであっても、決まって恐ろしい夢を見る。夢なのか現実なのか、過去の記憶なのかこれから起こることなのか——判然としない。ただ、気が変になるくらい恐ろしいことだけは確かだった。

鍵を掛け、出入り口に掲げられてある看板に目をやる。アメリカの農場をイメージして一枚板に

書かれた大きな文字——『ルイジアナ』

実際に行ったことはないが、閃きで何となくつけた店名だった。

小松は以前勤めていたジーンズショップの同僚だった吉川とともに二年前、アメリカン・カジュアルの古着ショップを始めた。こぢんまりとした店で、什器にも内装にも殆ど金を掛けなかった。小松が用意できた資金は僅かで、手作りも同然だった。却ってそれが幸いしたのか、A駅の繁華街から外れていたにも拘わらず、当初は繁盛した。金を掛けなかった分、黒字への転換は容易だと思われた。しかし、半年が過ぎ、一年が過ぎると目新しさは薄れ、客足が遠退き始めた。売り上げは激減し、そうなるとお決まりのパターンで、吉川との間で店の経営方針に関しての口論が絶えなくなった。結局吉川は、「お前の夢物語にはついていけねえ！」と捨て台詞を吐いて去っていった。小松は清々した。もともと吉川のセンスがいいと思ったことはなく、ひとりで始めるのが心細かっただけだった。吉川でなくとも、組むのは誰でもよかった。

ひとりになった小松は一気に挽回するため、それまで国内で買い付けていたのをやめて直接アメリカに赴いた。資金的に無謀だと反対していた吉川はいなくなり、これでイメージどおりの店造りが出来ると思った。だが、それでも客足は戻らず、残ったのは借金と在庫の山——アメリカでの買い付けは、借金を増やしただけで完全に失敗に終わった。

白い息を吐き出し、小松は国道へと向かった。これからタクシーでB市に行く。金を貸してくれる岩村は高校の先輩で、一緒にラグビーで汗を流した仲だったが、卒業後の消息は知らなかった。今ではかなり羽振りがいいらしい。知ったのはついさっき。ダメ元で借金の申し込みをした、同じラグビー部の同級生だった河本が岩村先輩の携帯番号を教えてくれた。この番号をもう少し早く知っていたら……せめて三日前に知っていたらと思うと小松は泣きたくなった。そして
たらあんな馬

鹿なことはしなくても済んだのにと、後悔の念があとからあとから胸中に湧き上がる。

小松は静かな国道の脇に立った。真夜中でもそれなりの交通量があるはずなのに、今日は少ないようである。舗道にも小松以外には向こうから歩いてくる若い男がひとりいるだけだった。

遠くに近づいてくる長距離のトラックが見えた。

タクシーは掴まるだろうか、と小松は不安になった。遅れてしまい、岩村先輩の機嫌を損ねては元も子もない。すると、そんな小松の心中を見透かしたかのように、一台のタクシーが小松の元にスーッと寄ってきた。

ドアが開き、小松は躊躇したあと、中に乗り込んだ。震えていた。が、心の奥底では安堵を覚えた気もした。

「やっと見つけましたよ、お客さん」と、運転手が再会を喜ぶように、親しみを込めて言う。

小松は引き攣った、弱い笑みを返すしかなかった。

——三日前。

小松は金策に追われていた。街金から借りた金の返済が迫っており、明日中に利子だけでも払わねばならない。自己破産という言葉が頭をよぎった。しかし、人生の落伍者の烙印だけは押されたくなかった。父親に対する意地もあった。仕事に理解を示そうとしない父——地方公務員の父の保証があれば何とかなっただろうが、父に頭を下げるのは癪だった。担保のない小松に銀行は冷たく、仕方なく街金を頼ってしまった。やがてこうなるだろうということは頭の隅にあったが、考えないようにしてきた。そしてそのとおりになってしまった。

「もう誰を当たればいいのか……」と、客のいない店内で呟く。

会ってくれないかもしれないが、最後の頼みの綱——小松はひとりの女を思い浮かべた。別れた妻の好恵である。店の経営が上手くいかなくなり、好恵の貯金にも手を出した。それを元にアメリカへ渡ったが、帰ってきたときに好恵はいなかった。離婚届が安アパートのテーブルに置いてあった。好恵とは五年暮らしたが、別れることに何の感傷もなかった。好恵は当然、返済を迫った。しかし、何だかんだと言い訳して未だに返していない。会いに行ける立場にないし、借金の上積みに応じてくれるとも思えなかった。だが他に頼れる当てはなく、恥を忍んで会いに行くしかない。好恵はブティックで働いているらしい。別れて一年……少しは金を貯めていることだろう。

近くのコンビニに寄り、ケーキを買った。好恵が好物だったモンブラン。こんなもので歡心を買えるとも思えなかったが、手ぶらで行くよりはましだ。このケーキが果たしていくらに化けてくれるか……。

コンビニの袋を提げ、小松は夜更けの国道に出た。目の前を大型トラックがスピードを上げて通り過ぎる。

飛び込んだら楽になれるだろうな……。

首を振って馬鹿な考えを頭から追い払うと、トラックの次に白い車が見えた。小松は手を挙げ、やってきたタクシーを止めた。

「どちらまで？」と、五十がらみの運転手が愛想のいい声で訊いた。

車内の暖房はほどよく効いている。

「C 駅まで」

「はい、分かりました」

ハキハキして気持ちのいい返事だった。何かいいことがあったのか、バックミラーに映る運転手

はにこやかな顔をしていた。

数分が経ち、小松は急に気掛かりを覚えた。別れたあと、好恵はC駅に引っ越したが、今でもそこにいるとは限らない。念のために確認しておいた方が良さそうだ。その前に、携帯の番号は変更されていないだろうか、との疑念も湧いた。コンビニの袋を脇に置き、鞆から携帯を取り出す。電話を掛けると呼び出し音が鳴った。番号を変更してはいないようだ。

「もしもし、俺だ」

「ああ、何よ？」

半年ぶりに聞く妻の声は醒めていた。好恵は諦めたのか、半年前から返済の電話をしなくなった。好恵に金以外の用件があるはずもなく、藪蛇になるので小松の方から電話することもなかった。音信不通が続いたあとの久しぶりの電話——好恵の突き放すような声。当然だ、怒っている。

「いや、どうしているかなと思って」

「何を言ってるの？ 心配してもらわなくても結構よ」

「そんなに邪険にするなよ。元夫婦じゃないか」

「元夫婦ですって？ 返すものも返してないくせに。それとも返してくれるとでもいうの？」

やはり藪蛇になってしまった。小松は好恵の怒りを鎮めるべく、優しい口調で話し掛けた。
「返すつもりではいるんだ。ただ店が上手く行ってなくて……。この危機を乗り切れればきっと上手くいくはずなんだ」

「そしたら返してくれるって訳？ 本当に？ 信じられないわ」

「本当だ。真っ先に返す。いろいろと返すところはあるんだが、好恵に真っ先に返す」

「ふうん」

好恵は気のない返事をした。信じたかどうかは分からなかったが、すぐに切られることはなさそう。

「それで、相談があるんだけど……」

「相談？ 相談て何よ？ どうせまたお金の話でしょ」

「それはそうなんだが、会って話がしたいんだ。今もC駅に住んでいるんだろ？」

「そうだけど……。どうということ？ ここに来るって言うの？」

好恵の声は困惑していた。借金の申し込みよりも、来られることを嫌がっているようだ。

「そのつもりでもうタクシーに乗っているんだ。ひょっとしたら引っ越したんじゃないかと思ったんだが、いてくれて助かった。あと十分もすれば着くから」

「そんな急に……。駄目よ」

「駄目？ どうして？」

「どうしても駄目」と、好恵が微かに狼狽えながらもキッパリと言う。

何かを知られたくないのは明らかで、それは男だと小松は直感した。

「誰かいるのか？」

「いないわよ、誰も」

「本当か？ それならどうして……」

電話の向こうで「誰から……」という男の声が聞こえ、その声は突然聞こえなくなった。好恵が電話を手で押さえたようだ。

好恵に男が出来ていた。別れて一年が経つものだから考えられた状況なのに、全く頭になかった。小松は裏切られた気がした。

「もう男を引っ張り込んだのか？」

下衆な言葉が口を衝いて出る。

「引っ張り込んだなんて言い方はよしてよ。私が誰と付き合おうと勝手じゃない」

こんな話を続けていては好恵が気分を害し、肝心の話を切り出せなくなると思ったが、抑えきれなかった。

「俺と別れる前から付き合ってたんじゃないのか？」

「わたしが浮気をしていたとでも言いたいのか？ 馬鹿らしい」

それほど人付き合いがいい方だとはいえない好恵が、こうも早く次の男を見つけたことに小松は疑念を持った。

「ひょっとして俺の知っているやつか？」

好恵は黙って答えなかった。

小松の頭には吉川が浮かんでいた。そういえば、時々店の手伝いに来ていた好恵は、やけに吉川と仲良くしていた気がする。

「吉川だな」

好恵は答えない。

「代われ」と言う、男の声が聞こえた。

「吉川か？」

「ああ」

吉川の素っ気ない声に、小松は憎しみを抱いた。意外だった。もう愛情の欠片も残っていないと思っていたのに、いざ吉川に抱かれていると思うと、どうしようもなく嫉妬に駆られた。そんな自

分を悟られたくはないので穏やかな口調を繕う。

「好恵と付き合っていたとは驚いたよ」

「そうか。それで何のようだ？」

吉川もことさら平静を装っているようだった。

「相談に乗って欲しい」

「相談？ 今さら何を話すって言うんだ。お前と話すことなんか何もない」

「そんな冷たいことを言うなよ。一緒に苦楽をともにした仲じゃないか。一年ぶりに会うのもいいだろ？ 喧嘩別れみたいになったから蟠りがあるかもしれないが、そこは水に流して……。実はもうそっちに向かっているんだ」

「こっちには何の用事もない。もうお前とは関わり合いたくないんだ。お前の誘いに乗ってジェーンズショップを辞めたのがそもそも間違いだった。お陰で苦勞続きだ」

「辞めたいと思っていたから渡りに船だ、って言ったのはお前だぞ。それに、関わり合いたくないと言っても好恵は俺の元妻だ。それをお前は奪ったんだからな、話を聞いてくれたっていいだろう」

「勘違いするなよ。付き合うようになったのはお前たちが別れたあとだ。お前が金を返さなくて、困っていた好恵の相談に乗ったんだ。お前の相談というのはどうせ金だろ？ それとも他に何かあるのか？」

「あるよ、いろいろと……」

小松はあとが続かなかった。

視線を感じてバックミラーに目をやると、運転手がチラチラと見ていた。盗み聞きされていたよ

うで不愉快になった。何もかもが面倒臭くなり、このままC駅に行くかどうか迷った。好恵を押し倒すつもりでいたが、行ったところで、吉川とくっついてしまった好恵が新たに金を貸してくれる訳がないし、逆に、遣い込んだ貯金の返済を迫られるのがオチだ。金話を切り出す前に、好恵のことで口論を吹っ掛けてしまうかもしれない。いや、部屋に入れてくれないかもしれないし、それどころか、行ったらアパートには誰もいないかもしれない――。

「どうした？ 何とか言えよ」

吉川が嘲笑するように言う。敗者をなぶる言い方――小松は惨めだった。沸々と怒りが湧き上がり、今なら人を殺せると思った。

「ああ、金だ、金の相談だよ。だがもういい。お前たちの世話になんかなるもんか！」

小松は壊れるほどの勢いで電話を切った。言っただけのもの、もう他に当てはない。

索漠とした思いが胸中を覆う。

さて……どうするか。

タクシーはC駅の近くまで来ていた。

「お客さん、C駅でいいんですか？」と、運転手が心配そうに訊く。

交渉決裂で行き先が変更になると思ったのだろう、やはり聞いていやだった。まあ、あれだけ大きな声を出せばそれも当然か。

「いや、戻ってくれ」

何の考えもなく、小松は口にした。C駅に行ったところで今の状況が変わることはない。行くだけ無駄だ、用はない。

「戻るって……A駅までですか？」

「ああ」とぞんざいに答え、小松は目を閉じた。

「それじゃ、先の交差点でUターンしますから」と言う運転手の声が遠くに聞こえた。

これで最後の頼みの綱が切れた。まだ借りていない他の知人の顔を思い浮かべるが、やはり当てになりそうな者はいない。

どうすればいいのか――。

それにしても、好恵と吉川が付き合っていたなんて驚きだったな。吉川は、俺と好恵が別れたあとくつついたようなことを言っていたが、怪しいもんだ。その前から二人の関係は始まっていたに違いない。俺が店のことだけを考えて忙しく立ち働いていたというのに、あいつらときたら……くそっ！

躰が横に大きく揺れ、小松は目を開けた。タクシーが国道を旋回していて、座席に倒れそうになる。思わず運転席を掴むと、ケーキの入ったコンビニの袋が座席の向こうに滑っていった。

「危ないじゃないか！」と、苛立ち紛れに小松は口走った。

「あっ、済みません。大丈夫でしたか？」

「何とかな」

横柄に言ったあとで自分が厭になった。運転手の方が遙かに年上だし、運転手は前もってUターンを予告してくれていた。なのに、それを忘れて声を荒げてしまった――。

小松は向こうに滑ったコンビニの袋を脇に寄せた。中のケーキは潰れていないだろう。だが、どうでもよかった。用をなさなくなったモンブラン――嫌いではないが、自分で食べる気はしない。

「運転手さん、歳は幾つ？」

詫びたい気持ちもあり、運転手との関係改善を図ろうと、小松はことさら明るく言った。

「私ですか？ 私は今年、五十八になります」

すると親父より一つ上か……。

「この仕事、始めて長いの？」

「いいえ、まだ始めたばかりです。定年を前にリストラされまして……まだ慣れなくて申し訳ありません」

技量不足を客が怒っていると思ったようだ。小松はますます申し訳なくなった。

タクシーはA駅に向かって走っている。

「お客さんの方は仕事は何をなさっているんですか？」

「ファッション関係……」

「華やかでいいですね」

「いいもんですか。売上げがさっぱりで、金策に走り回っているんです。聞こえたでしょう？ 借金を断られたところですよ」

「そうなんですか、大変ですね。でもお客さんはまだ若い。これからですよ。いくらだってやり直しはききます」

あまりにも有り触れた、陳腐な慰めだった。まあ、初対面の人間に掛ける言葉としては妥当なところか。

「やり直しねえ……」と、投げやりに言う。

「私だってこうしてやり直しているんですから、若いあなたに出来ない訳がありませんよ」

車内はいつの間にか人生相談の様相を呈し始めた。

「タクシーの前は何をしていたんですか？」

「サラリーマンですよ、普通の。お客さんと違って地味な会社でして、海産物の輸入をやっている会社なんですが、これが男ばかりで……」

「輸入？ 運転手さんも買い付けとか行ってたんですか？」

「ええ、年に四、五回ほど。アメリカやオーストラリア辺りを中心に」

「ひょっとしてルイジアナにも行ったことがありますか？」

「ルイジアナには行ったことがないですね。主に西海岸ですよ。カリフォルニアとか……」

ルイジアナがどんなところか聞いてみたかったが、それは無理だったようだ。

「他には？」

「他には……アフリカにも行ったことがありますね。たまにですけど」

「そんな遠くまで……」

小松は感嘆の声を漏らした。アフリカにまで買い付けに行くくらいだから、運転手のいた会社はそれなりに大きかったのだろう。

「ずいぶんと活躍なさってたんですね」

「活躍だなんて大袈裟ですよ。でも、まあ……自負はしてるんです、会社の業績に貢献出来たかなって。ですが、結果はこれです。中国系の企業がどんどん浸食してきて……気がついたらタクシーの運転手ですよ」と、運転手が自嘲気味に言う。

「タクシーだって立派な仕事じゃないですか。それじゃ、英語とかペラペラ喋れるんでしょう？」

「何かもったいないなあ」

「喋れないと仕事になりませんからね。今では無用の長物です。たまに外人さんを乗せることがありまして、そんな時に役立つくらいでしょうか」

小松は大学を出たというのに殆ど英語を喋れなかった。そのためにアメリカでの買い付けは苦勞の連続だった。何とかなるだろうと高を括っていたが、思っていた以上に何ともならず、お陰で欲しい商品は値段を吹っ掛けられ、知らない間に要らないものまで売りつけられた。冴えなく見えていた、運転手の意外な才能に、小松は羨望を覚えた。

「英語を活かした仕事とかなかったんですか？」

「もう少し若ければなくはなかったのかもしれませんが、歳が歳ですからね。それに車の運転は好きですから満足しています。正直、肉体的にきつい時はありますが……。お客さん、ファッション関係の他には何か興味はないんですか？ 思い切って私のように他の業種を考えるのも手ですよ」

「他の業種ねえ……」

小松は気のない返事をした。他に何が出来るかなって考えたこともないし、第一、まだ店を何とかしたいと思っている。

「勿論、変わらずに済めば今までの経験が活かれますからね、それに越したことはないと思うんですが……何事もチャレンジ精神ですよ」

「そうかもしれませんね……」

それきり会話は途切れた。タクシーはもうすぐ『ルイジアナ』に着く。

店を何とかするためには利息分だけでも都合をつけなければならない。しかし何の方策も浮かばない。小松は失意の中にいた。ただ、この運転手との会話は心地よかった。懐かしい感じがして、小松は父を思い出した。一つ違いの運転手——肩の辺りが似ていなくもない。子供の頃は父と子の、当たり前のような関係があった。普通の父親と息子がやるようなキャッチボールや釣りなどをした覚えがある。

借金の話はしなくとも、会うだけ会ってみるか――。

そうは思ってみたものの、会いに行ったとしても喧嘩になるのは分かり切っていた。息子の仕事ぶりが話題にならないはずはなく、父が独善的な説教を始めるのは目に見えている。どうにか二人を繋ぎ止めていた母が死に、こんな関係になってしまった。母はD市の霊園に眠っている。救いを求めるように、小松はそこまで行ってみようと思った。タクシー代は掛かるが、ずっと店のことに係り切りでろくにお参りをしていない。

「そろそろA駅ですが、お客さんを乗せた辺りでいいんですか？」

「いや、このまま行ってください」

「このまま？ A駅を過ぎるんですか？」

「ええ。D市に行こうと思います」

バックミラーに映っている運転手が微笑んだような気がした。

「嬉しそうですね？」

「ええ、D市ですからね。実はさっき乗せたお客さんもD市までだったんですよ。長距離が続くと嬉しくなってしまいます。今日はついているみたいですね。いつもならB駅界限をセコセコ走ってるんですが」

「ついているか……羨ましいですね。このところ、私は全くついていません。運に見放されっぱなしで、もう死にたいくらいですよ」

それは半分、本心だった。小松は自棄を起こしそうな自分を意識していた。自ら命を絶つことはしないが、誰かに殺されるとしても命乞いはしないだろう。

「そんな……死にたいなんて言わないでくださいよ。言われたこっちは何と云えばいいのか……」。

とにかく生きてさえいればいいこともありますって。運なんてどっちに転ぶか分かりませんから」

「そうなんでしょうけど、いい方に転がった試しなんてありませんよ」

「私の売りに上げたって、今日はよくても明日はどうなるか分かりません。一日走って二、三万にしかならない日もありますし……」

「それじゃ、今日はその倍以上は稼いでいるんでしょうね？」

「お陰様で……もう少し。三倍は超えていますかね」

バックミラー越しに見える運転手は、本当に嬉しそうな笑みを零していた。『ルイジアナ』では客がひとりも来ない日が月に何日かある。小松は心底羨ましくなり、大きな溜め息を吐いた。

窓の外を見やる。国道沿いには点々と明かりがあった。真夜中でも営業している店はある。しかも意外と多い。営業時間を深夜に変えれば他店との差別化が出来るだろうか、と小松はふと考えた。夜に来店する客は案外多いかもしれない。ディスカウントショップやコンビニなどには、若い客は夜でもやってくる。希望に胸が少し膨らんだところで、それはいともあっさり萎んだ。そんなことをする以前に、眼前の金が用意出来なければ店の存続すら覚束ない。

「済みません、お客さん。何か余計なことを話したようですね」と、運転手が謝った。

黙り込んだ小松が自分の自慢話に腹を立てたのではないかと危惧したようだ。

「いや別に……」

上の空の返事。小松は運転手の言葉に耳を傾けてはいなかった。目の前をコンビニが過ぎていった。深夜にも拘わらず、結構な数の客がいた。が、それは予想し得たことで、小松は別のことを考えていた。

売上げはどのくらいあるのだろうか。一日当たり三、四十万くらいだろうか。とすると、レジ

にはいくらかの金があるのだろう。『ルイジアナ』では釣り銭用に三万を用意していた。それに近い金額プラス売り上げがあるはずだ。防犯上、釣り銭以外の金は定期的に事務所の金庫にしまっただろうから、多くても十万あるかどうか——。いや、五万くらいかもしれない。五万でも当座の言い訳にはなる。金庫を開けられたならもっと——

危険な誘惑が小松を突き動かす。しかし、強盗をやるには武器となるものを何も持っていなかった。だが、それはすぐに解決した。コンビニだ、何かしらの刃物は置いてある。包丁はないかもしれないが、ハサミやカッターならありそうだ。

「運転手さん、喉が渴いたんで、コンビニを見つけたなら止まってくれませんか？」

「はい、分かりました」

小松は、自分が本気でそんなことを考えているとは思っていなかった。強盗なんて出来るはずがない。ただ——ちょっと——様子を見るだけだ——。

やがてコンビニの看板が見えると、運転手は駐車場にタクシーを停めた。駐車場に他の車はなかった。小松が小走りでコンビニの入り口に向かうと、その背中に運転手の視線が感じられた。借金の話を聞かせたから、乗り逃げを恐れているのだろう。

自動ドアが開き、「いらっしゃいませ」の声が響く。レジにいるメガネを掛けた若い店員はアルバイトのようで、脅せば怯んですぐにでもレジを開けそうな弱々しい男に見えた。他に客も店員も見あたらない。今、店内にいるのは小松とレジにいる若い店員の二人だけだった。

この状況はついているのだろうか、悪魔に後押しされているみたいだ。

小松は俯き加減に、陳列されている商品を眺めながら、武器となりそうな刃物が何処にあるか確かめた。やはり包丁は置いてないようだったが、文具用品の棚にカッターがあった。手に取って、

凝視する。これなら使える、やれそうだ——と思ったのも束の間、店の隅の防犯カメラが目に入った。レジに目をやるとレジの上にもしっかりと防犯カメラが設置されている。あのカメラで撮られた映像をテレビで何度も見たことがある。自分もそのひとりになってしまうのか。覆面もサングラスもしておらず、素顔を晒したままだ。この場は成功したとしても、果たして逃げ切れるだろうか。失敗したら間抜けな強盗としてお茶の間に自分の顔が流れ、吉川や好恵が腹を抱えて笑うだろう。それだけのリスクを負って手に入る金はいくらだ？ 下手したら釣り銭だけかもしれない。金庫は？ あの店員が金庫の番号を知っているとも思えない。

メガネの店員がこっちをじっと見ている。不審者に思われたのだろうか、しっかり記憶するように顔を見られた。

「いらっしゃいませ」

新たな客がひとり来た。ジャージを着た、いかにも柔道をやっていそうな男だった。

無理だ。

小松は自然を装い、飲み物のコーナーへ移動した。缶コーヒーを取ろうとして自分の手にまだカッターがあるのに気づいた。今さら戻しに行っても変に思われそうな気がして、カッターを左手に持ち替え、右手で缶コーヒーを取った。運転手の分もあわせてふたつ。運転手の心証を少しでもよくしておきたかった。

レジで会計をする。メガネの店員が何処か訝しげな顔で「ありがとうございました」と言い、お釣りを手渡す。小松は、今まで誰にも見せたことのない愛想笑いを浮かべていた。

缶コーヒーふたつとカッターの入った袋を提げて外へ出ると、寒風が堪えた。駐車場のタクシーへと急ぐ。

「運転手さんもどうですか」

缶コーヒーのひとつを袋から取り出し、座席越しに渡すと、運転手は恐縮して頭を下げた。

「ありがとうございます」

「何度も行き先を変更したお詫びですよ」

駐車を動き出したタクシーが国道に入る。

小松は缶コーヒーを飲みながら、買ったばかりのカッターを、脇にあったもうひとつのコンビニの袋に入れようとした。中には好恵に渡すつもりだったモンブランがあった。

「運転手さん、甘いものは好きですか？」

「甘いものですか？ ええ、まあ」

「よかった。さっき買ったモンブランがあるんですよ。人に渡すつもりだったんですが、会えなくなってしましまして……。私はそれほど甘いものは好きではありませんので、もしよかったらもらってくれませんか？ 棄てるのももったいないですし……」

「モンブランですか。それなら遠慮なくいただきますよ。娘が喜びます」

「娘さんがいらっしゃるんですか？」

小松は後ろから身を乗り出し、モンブランの入ったコンビニの袋を助手席にそっと置いた。運転手が小さくお辞儀をする。カッターの入った袋だけが小松の脇に残った。

「遅くに出来た子でしてね、今度中学に上がるんですよ。娘の成長だけが生き甲斐といいますか……まだまだ楽は出来ません」と、幸せそうに運転手は言った。ミラーには映っていなかったが、満面の笑みだったことだろう。

国道を走るタクシーの前後には一台の車もなかった。

「お客さんは、お子さんはいらっしゃるんですか？」

唐突に運転手が訊いた。

「いいえ、いませんよ。いたらとっくに一家心中だったでしょうね」

そんな小松の自虐的なギャグに運転手が笑ってくれるはずはなく、困惑させただけだった。

「済みません。余計なことを訊いてしまったようですね。……お客さん、D市の駅の方でいいんですか？」

D市？ 一瞬きょとんとしたあと、小松は母の墓参りに向かおうとしていたのを思い出した。

「霊園の方へ」

「霊園ですか？ こんな時間に……」

「いけませんか？」

「いえいえ、そんなことは……」

運転手は明らかに不審がっていた。それはそうだろう。こんな深夜にタクシーを飛ばして霊園に向かう者などいない。いくら母親の墓参りを思い立ったからとはいえ、非常識が過ぎる。運転手は気味悪く思っているに違いない。まさか自分を幽霊だなんて思っていないだろうが、もしそうなら、それはそれで面白い。小松は可笑しさが込み上げてきた。

「タクシーで霊園に行く、なんて言うのが怪談めいていますが、そんな話、よくありますよね。髪の毛の長い、若い女を乗せたらいつの間にか消えていたとか……。運転手さんは幽霊を乗せたことは？ まさかある訳ないですよ」と、最後は冗談めかして小松は言った。

「ええ、私は一度もありませんよ。ですが……同僚にひとりいましたね」

「本当？ やっぱそういう話はあるんだ。で、どんな話です？」

作り話ではなく実際にあった話——小松は興奮を覚えた。

同僚の話であれば信憑性も高いだろう。

「それが……若い女じゃなくて、車なんですよ。車の幽霊とでも言いましょうか、同僚の……重村っていうんですが、重村の目の前を走っていた白い車がスーッと闇の中に消えたそうです。最初は明かりの関係でそう見えたのかと思ったのですが、そこは一本道で右にも左にも曲がれるところはなく、前を走っていたトラックに吸い込まれるようにスーッと……」

もっとおどろおどろしい話を期待していただけに、正直、小松はがっかりした。

「車が消えるねえ……追い抜いたんじゃないですか？」

「いえいえ、白い車は前を走るトラックに、ぶつかるようにスピードを上げたので、危ないなと思い、重村はしっかり見ていたそうです。前を走る二台の車が事故を起こしたら、自分も巻き込まれてしまうかもしれませんからね。重村はキッパリと言いました、見間違いなんかじゃなくて、白い車は確かにトラックの中に消えていったって。そりゃあ、話を聞いた仲間は最初、笑いましたよ、目の錯覚だとか、怖がらせようとしてるんだらうとか言って……。でも今じゃみんなが信じてます。そいつは真面目な男でしてね、それ以来、何かに取り憑かれたかのように人が変わってしまったんです。人間、よほどのショックがなければあそこまで変われませんからね。結局、会社を辞めてしまいました」

「辞めたんですか……」

小松は同情した。運転手の話は怖くなかったが、その見知らぬ重村という人が気の毒でならなかった。これで話は終わり——そう思っていると、運転手は話を続けた。

「タクシーの仕事が怖くなったと言ってました。ノイローゼになってしまったんでしょう、そのあ

とも何度か同じ車を見かけたそうで……見るに忍びませんでした。一生懸命に生きてきただけの男だったのに、何であんな目に遭うのか……。前を走っていた車のことを、最初は白い車と言っていたのに、いつからか白いタクシーと言うようになっていました。当社のタクシーは白です。だから乗車するのが怖くなったんでしょう。それで辞めたんですが……どういう因縁なのか、重村はスピードを出し過ぎたタクシーに撥ねられて死んでしまいました。もちろん白いタクシーです」

何とも哀れで、悲惨な結末だった。

車内が重苦しい空気に包まれ、ふたりとも押し黙った。小松は車窓を眺めていた。

タクシーは国道を走り続けている。沿道の施設や商店は明かりを失い、黒々とした闇に畑が広がっている。その闇の中に白い車が見えた気がして、小松はビクツとした。あんな話で怖がるなんて——と、自分の小心を嘲笑った。それでも胸中には薄気味悪さが残っていて、窓から身をずらすと、脇に置いていたコンビニの袋に手が触れた。缶コーヒーを買ったコンビニの袋。忘れていて空き缶を放り込んだが、中にはカッターが入っている。何とはなしにカッターを取り出し、パッケージを外してカタカタといじり始める。無駄な買い物だったな、と思った途端、思い出したくもなかった現実が蘇ってきた。

借金をどうするか——。

問題が片付いていないのに、どうして墓参りなんて考えたのだろう。死んだ人間が助けてくれる訳でもないのに——。

カッターをカタカタと鳴らす。

唯一の当てだった好恵は駄目になった。

カッターを鳴らす。

コンビニ強盗も未遂に終わった。

カタカタと鳴らす。

バックミラー越しに運転手が見ていた。手元は見えていないだろうが、音で何を持っているか分かったかもしれない。

やるしかない。

向こうが警戒する前にやるしかない。今日は売り上げがいいと言っていた、脅すだけだ、脅すだけ。この運転手も抵抗するほど馬鹿じゃないだろう。金と車を奪って逃げる——。幸い、国道を走っている車はこのタクシー以外にない。千載一遇のチャンス、今ならやれる——。

「ちょっと止まってくれ」

「こんなところですか？」と、運転手は不審がった。

「いいから止まってくれ」

「はい……」

厭そうに言う運転手の声には緊張が窺えた。

タクシーは左へゆっくりと移動し、そして路肩に停まった。

素早く身を乗り出し、カッターの刃を運転手の首に向ける。

「こんなことはしたくなかったんだが……金を出してもらおうか」

運転手の肩が小刻みに震えていた。これなら簡単に終わりそうだ、と小松は思った。

「馬鹿な真似はやめてください。お客さんは若いんだ、まだいくらだってやり直しがききます」

「ごちゃごちゃ言っていないで金を出すんだ。今日は運がいいんだろ？ たっぷり稼いだって言ってたじゃないか」

「稼いだと言っても高が知れています。お客様の借金がいくらあるのか知りませんが、焼け石に水ですよ。僅かの金で人生を棒に振ることはありません。考え直すんです。地道に、懸命に働いていれば……まっとうに生きてさえいれば運が向くこともありますよ」

運転手の思いがけない説教、しかもそれは父親から聞かされていたものと同じ正論で、小松は苛つかされた。

「お説教なんていいんだよ！ 何様のつもりだ。出すのか出さないのか、どっちなんだ！」

「分かりました。分かりましたから、それをどけてください」

小松はゆっくりとカッターを引っ込めた。

運転手が屈み込んで金を用意し始める。

心が痛んだ。痛んだが、安堵感の方が大きかった。売り上げがいくらあるのかは分からないが、これで当座は凌げるだろう。

突然、運転手がドアを開け、逃走を図った。

騙しやがった！

小松は激高し、急いであとを追った。

先を走る運転手が舗道を曲がり、脇道へ入る。電信柱からの弱い明かりが細い道を照らしていた。数十メートル走ったところで追いつき、小松はカッターを振り下ろした。殺すつもりはなかったのに、ただ脅すだけだったのに——。殺されると本気で思って逃げた運転手が赦せず、何度もカッターで傷つけた。しかし、運転手が両手で防御するので決定的なダメージを与えることは出来なかった。運転手が命乞いをする。娘の話をする。それでも小松は憎悪を抑えられず、運転手の頭を掴んで電信柱に打ち付けた。やがて運転手の躰は電信柱にもたれるようにしてズルズルと落ちて

いった。小松は財布を抜き取り、急いでタクシーに戻った。売り上げを奪う。バックミラーを使って振り返りを浴びていないか調べる。それらしきものはなかった。目の端にコンビニの袋が映った。助手席に置かれた袋、その中にはケーキが入っている。好恵にあげようとして叶わず、運転手が娘にあげるのを楽しみにしていたモンブラン。小松はモンブランをコンビニの袋から取り出し、箱ごと助手席の窓ガラスに投げつけた。一面にモンブランの欠片が飛び散る。残骸を茫然と見ていた小松は、夢から覚めたようにタクシーから転げ出た。そして、見えない何かに追われているかのように、暗い闇の中を何処までも逃げた。

吉川の証言

「まさかこんなことになるなんて……。もっとちゃんと話を聞いてあげればよかったと後悔しています。ふたりで古着の店を立ち上げたんですが、経営の方針が合わなくて……。おまけに小松とは女性問題もあったものですから、軋轢があったといいますか……。それで力を貸そうとはしませんでした。こんな結果になって残念です。それにしても、小松が自殺を図るなんて意外でした。ガッツだけが取り柄のような男でしたから、今でも信じられません」

元妻・好恵の証言

「私も驚いています。自殺するような人には思えなかったものですから。そこまで追い込まれていたんでしょうけど……。あの人は夢ばかり追いかけていました。そのために周りが見えていなかったんです。私がどういう気持ちでいたか、考えようともしてくれませんでした。将来、子供が出来たときのために貯めていたお金を、黙って引き出したんですよ。赦せませんでした。死んだ人間を

悪く言いたくはないんですが、あの人は現実が見えていなかったんです」

高校の先輩・岩村の証言

「小松から電話が掛かってきたときは、思い出すのに時間が掛かりましたよ、何年かぶりでしたからね。それほど親しくしていなかった俺にまで借金を申し込んできたんですから、相当やばかったんでしょうね。結局会えずじまいでした。もう少し早く連絡してくれたら、あいつも自殺なんかしなくても済んだでしょうに……。金策に追われておかしくなったのか、妙なことを言ってましたよ、タクシーに乗るのが怖いって。ねえ、変でしょう。大の大人がタクシーに乗るのが怖いだなんて……。やっぱりどうにかなくなってしまったんでしょうね」

高校の同級生・河本の証言

「ええ、岩村先輩の電話番号を教えたのは私です。私も同じラグビー部にいまして、小松とは多分、一番仲がよかったと思います。誰か金を都合してくれる人を知らないかと言われてまして、岩村先輩のことを話しました。そのときの様子が……。ちょっと変でしたね。車の幽霊を見たことがあるかとか、娘さんにケーキを持って行かなきゃとか、言ってることが支離滅裂で、クスリでもやっているのかと思いましたよ」

舗道にいた通行人の証言

「厭なものを見てしまいました。あれは覚悟の自殺でしょうね。でも……。妙な感じでした。自殺し

た人は最初、タクシーでも待つかのように、舗道に立っていたんです。そのうち国道の中へ歩き始めて、何をしてるんだろと見ていると、まるでタクシーに乗り込んだかのように、国道の真ん中に座り込んだんです。走ってくるトラックに飛び込むにしては妙な動きでしたね。覚悟の自殺ではなかったのかもしれませんがね。タクシーに乗る幻覚でも見ていたのかも。でも、どうしてトラックは止まらなかったんでしょう、自殺した人との間にはだいぶ距離があったのに。いくら夜中とはいえ、トラックの運転手は気づくんじゃないでしょうか」

大型トラックの運転手の証言

「どうして止まらなかったんだと言われても、私が悪いんじゃないありませんよ。急いでブレーキを踏んだんですが、間に合わなかったんです。いえ、決して前方不注意ではありません。ちゃんと前を見ていました。前には白いタクシーがいたんです。間違いありません。道の真ん中で停まっていたから変だとは思ったんですが……。通行人は見ていない？ そんなはずはありませんよ。私はこの目で見ました。もう一度通行人から話を訊いてください。前方不注意で人身事故を起こしたとなったら私はどうしたらいいのか……。それで、停まっていたタクシーが動いたと思ったら、突然、男が目の前に座っていたんです。驚いて急ブレーキを掛けたんですが、遅かった……。タクシーですか？ 会社名とか訊かれましても……。そこまでは見ていませんでした。白いタクシーがいたのは本当なんです。でまかせじゃありません。そのタクシーは、信じられないかもしれませんが……。闇の中にスーッと消えたんです」